

# 宇和島城追手門跡 現地説明会資料

【調査期間】平成 22 年 2 月 16 日～ 18 日

【調査場所・対象面積】本町追手 2 丁目 703 番地・約 100 m<sup>2</sup>

【調査理由】不動産評価のための試掘確認調査 本格調査ではない

【調査成果】

追手門の石垣根石 11 石を確認。1 辺が 1 m ほどとなる巨石も使用されている。

位置の特定 今回発見した根石と史料類を総合的に判断

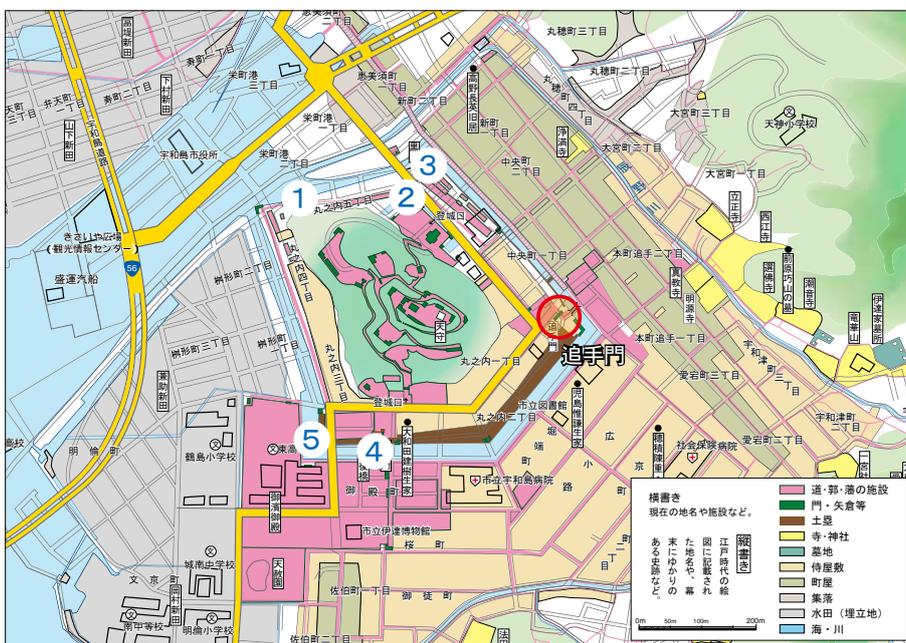
旧国宝指定の範囲 追手門として構造をなすための範囲

年代の特定 石割の痕跡となる矢穴や土層の状況から

藤堂高虎の慶長期 (慶長 1 年～ 6 年 (1596～ 1601)) に普請されたものを、伊達家が改修して使用。

【保存に向けてー追手門跡が物語るもの】

- ・ 藤堂高虎の慶長期にまでさかのぼる貴重な遺構
- ・ 宇和島城の本来の範囲をしめすもの
- ・ 旧国宝であった櫓門の遺構
- ・ 宇和島空襲と戦災復興 得たものと失ったもの



箆(はず)矢倉(年不詳)  
松下釣具さんの駐車場のあたりです



潮見矢倉(明治 43 年前)  
消防署のあたりです



材木蔵角矢倉跡(大正 2 年)  
手前の堀は東高のグラウンドのあたりです



搦手(からめて)門と豊後橋(大正 2 年前)  
松林眼科さんのあたりです



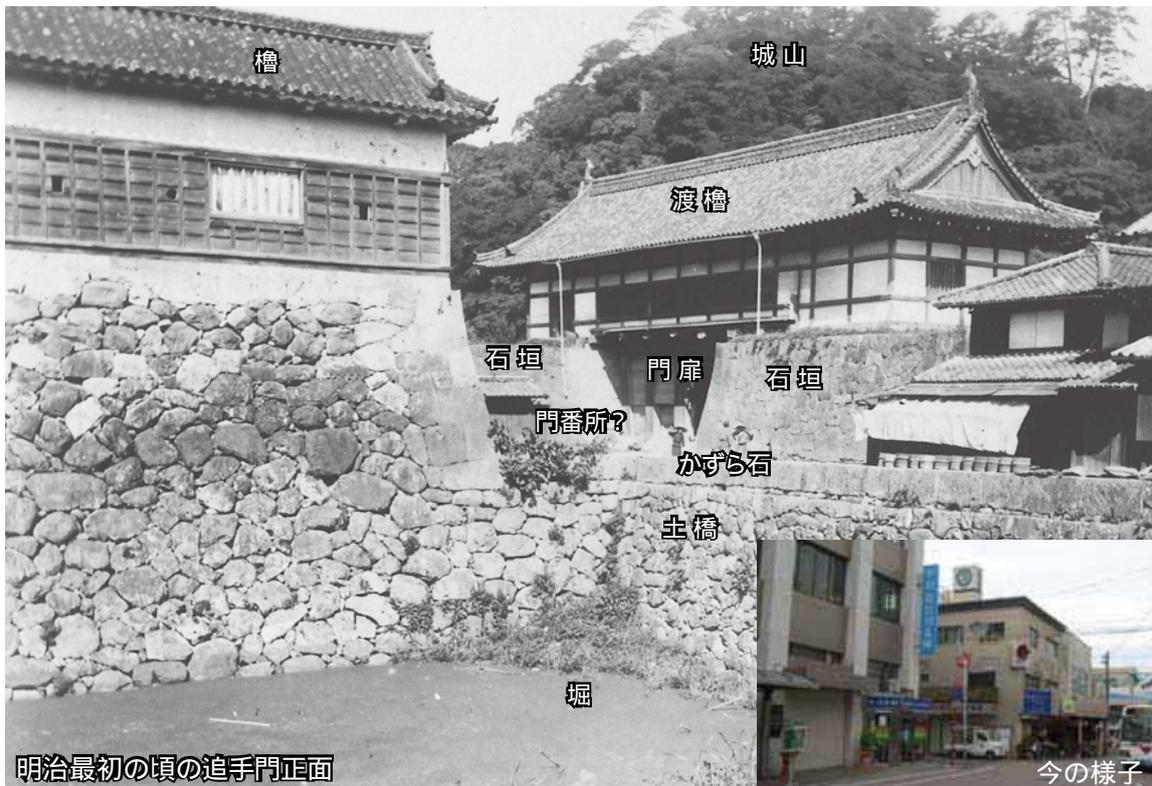
黒門矢倉と黒門(明治 42 年前)  
保木口ビルさんのあたりです

## 追手門って何？

城の正門という意味を持ちます。大手門とも書かれます。宇和島城の追手門は、櫓門<sup>やぐら</sup>という形式の門となります。ちなみに、“おたもん”と呼ばれていた方もいらっしゃるかと思いますが、これは“多聞(多門)”から転じたものではないかと思えます。多聞というのは、城の用語では石垣の上に築いた長屋造りの建物という意味です。絵図にも“御多門”と記されていて、おそらく、櫓の部分のことを指して呼んでいたことが推察できます。

## 櫓門ってどんな門？

櫓門は、言葉のとおり、門の上に櫓を渡した2階建の城門で、その櫓は渡櫓と呼ばれます。当時の戦法では、絶対に破ることのできない究極の構えでした。渡櫓の窓から射撃し、門扉まで攻め寄せた敵には、その頭上に開く石落<sup>いしおとし</sup>で攻撃しました。また鯨瓦を飾ることのできる格式の高い門でもありました。宇和島城の追手門は、門の両側に石垣を築き、その上に櫓を渡している構造です。



手前にはまだ堀が埋め立てられず、土橋がかかっています。その土橋の端にはかずら石(縁石という意味だそうです)が見えますが、これは天赦園入ってすぐの辺りに数石、移設されています。



## 宇和島城追手門関連年表

年代		記事・絵図	出典	
近 世	慶長1 ～6年	1596～ 1601	藤堂高虎が板島丸串城（宇和島城）を築城する。	
	元和3年	1617	将軍秀忠より拝領した伏見城下馬札2枚を追手に立てる。	御歴代事記
	正保1 ～2年	1644～ 1645	正保絵図	絵図
	慶安2年	1649	2月5日、大地震があり、追手見付（枳形を持つ城門の外側）の大石が抜け、同所西方の石垣が崩れた。	
	慶安3年	1650	追手、そのほか城の周りの破損を修繕。	
	寛文6年	1666	追手門完成（修築）、カズラ石（土橋石垣か?）はこの時にできたという。	
	天和2年	1682	追手搦手の下馬札破損のため、書替える。	御歴代事記
	貞享2年	1685	地震のため、追手に被害。	御歴代事記
	元禄4年	1691	幕府に追手土橋石垣の修復伺を提出する。	御歴代事記
	元禄5年	1692	大風によって追手門北側の鯨が落ちる。	御歴代事記
	元禄6 ～8年	1693～ 1695	宇和島城屏風絵図	絵図
	元禄8年	1695	追手搦手下馬札立て替える。	御歴代事記
	正徳年間	1711～ 1716	正徳絵図	絵図
	享保12年	1727	夏、強雨のため、追手御土手崩れる。	御歴代事記
	安永5年	1776	安永5年絵図	絵図
	文化10年	1813	追手御堀端の土手高を以前のとおり修復する。	御歴代事記
	文政4年	1821	追手下馬札破損し、立て替える。	御歴代事記
	文政6年	1823	追手門の堀を修繕する。	御歴代事記
	安政元年	1854	地震により追手長矢倉と石垣が破損。	
安政4年	1857	追手長矢倉と石垣を修理。		
安政・文久	1850～ 1860年代	安政・文久絵図	絵図	
近 代	明治33年	1900	追手（カズラ石）より内港に至る堀を埋め立てる。	
	明治42年	1909	追手（カズラ石）より西河裡角櫓下までの堀を埋め立てる。	
	昭和9年	1934	天守、追手門が国宝に指定。	
	昭和12年	1937	国史跡に指定。	
	昭和20年	1945	追手門が戦災で焼失。	
現 代	昭和25年	1950	文化財保護法が制定され、従来国宝保存法で定められていた国宝はすべて重要文化財となる。 追手門一帯を市が伊達家より買収し、都市計画の換地調整用地とする。	
	昭和26年	1951	秋「国宝追手門旧蹟」石碑建立	



## 十萬石には過ぎた門？

宇和島城の追手門は、その規模の大きさから、十萬石には過ぎた門だといわれていたそうです。昭和9年の国宝指定されたときも、“すこぶる大である”と評価を受けていたほどです。あらためて昔の資料を調べると、追手門の規模を示す資料を見つけることができました。

渡櫓	桁行 12 間 (約 24m) / 梁間 4 間 (約 8m)	1 間 = 6 尺 5 寸 = 約 2m で計算しています。
	高さ 4 間 5 分 (約 10m)	“分” は、普通は長さの単位には使いませんが、“1 間の何割” という意味で使用されたと考えられます。
石垣	高さ 2 間 6 ~ 8 分 (約 5.2 ~ 5.6m)	
門扉	幅 3 間 6 尺 (約 7.8m)	

現存している他城の同じ種類の門をいくつか挙げてみました。これをみても、宇和島城の追手門が大きなものだったことがわかります。

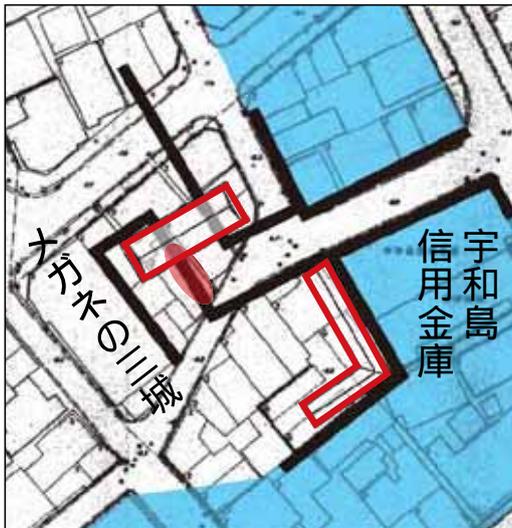
高知城大手門：桁行 11 間 / 梁間 4 間  
丸亀城大手一ノ門：桁行 13 間 / 梁間 3 間  
二条城二の丸東大手門：桁行 12 間 / 梁間 3 間



戦前の追手門裏側と現在の様子

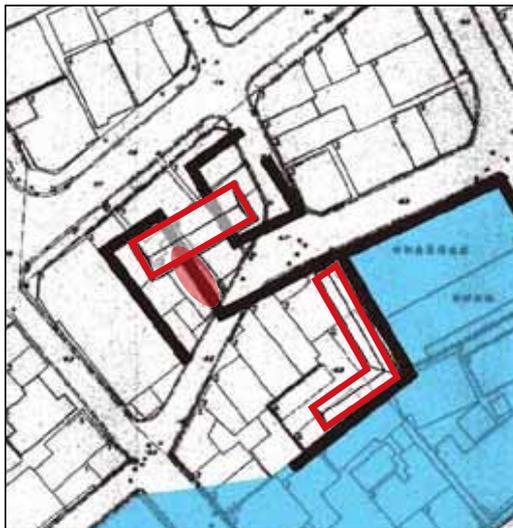


幕末



明治初期ごろの追手門正面

明治 33 ~ 42 年

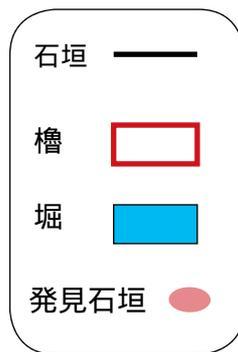


明治 42 年以降の堀を埋め立て後の追手門正面

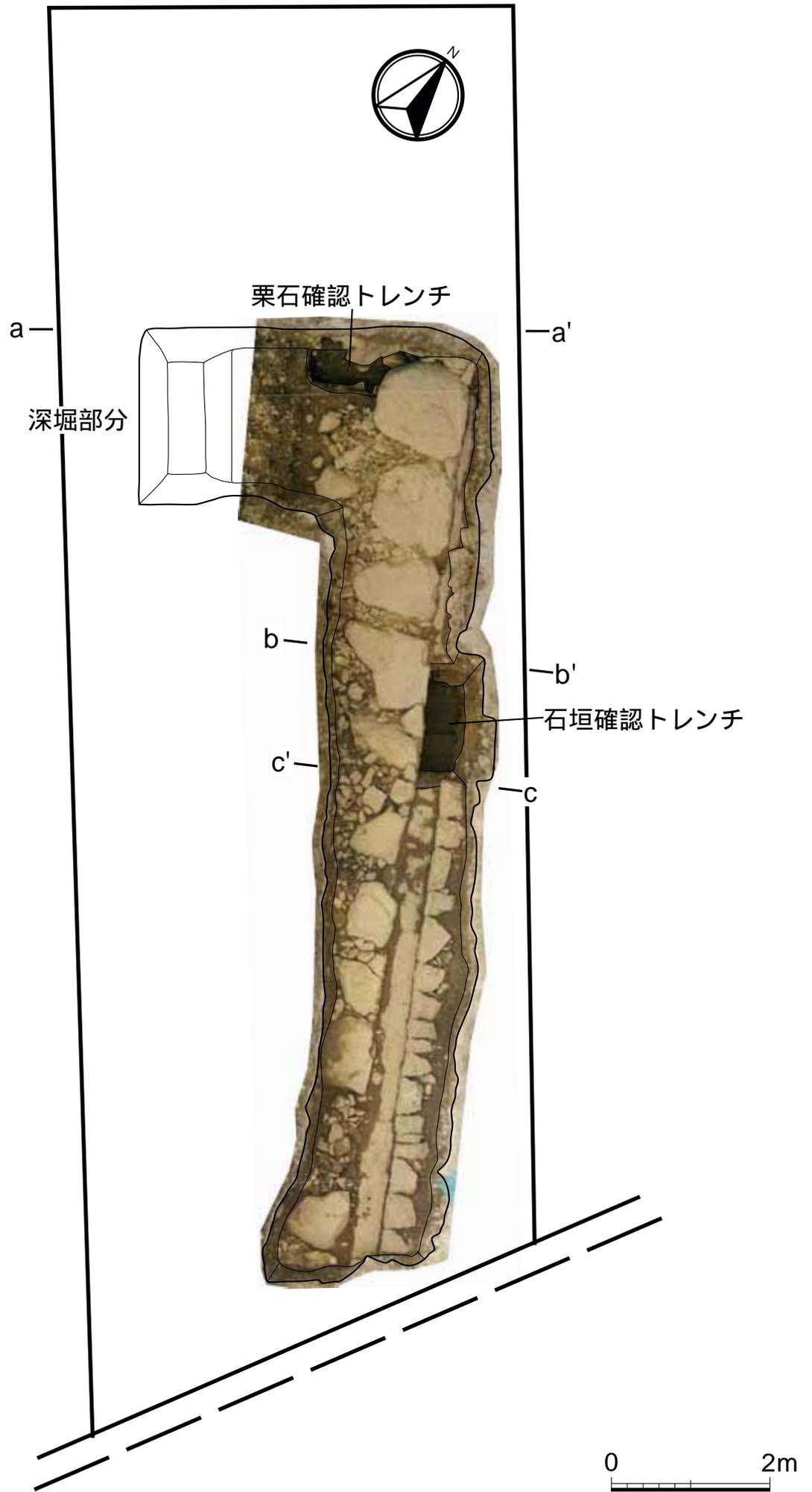
明治 42 年 ~ 戦前



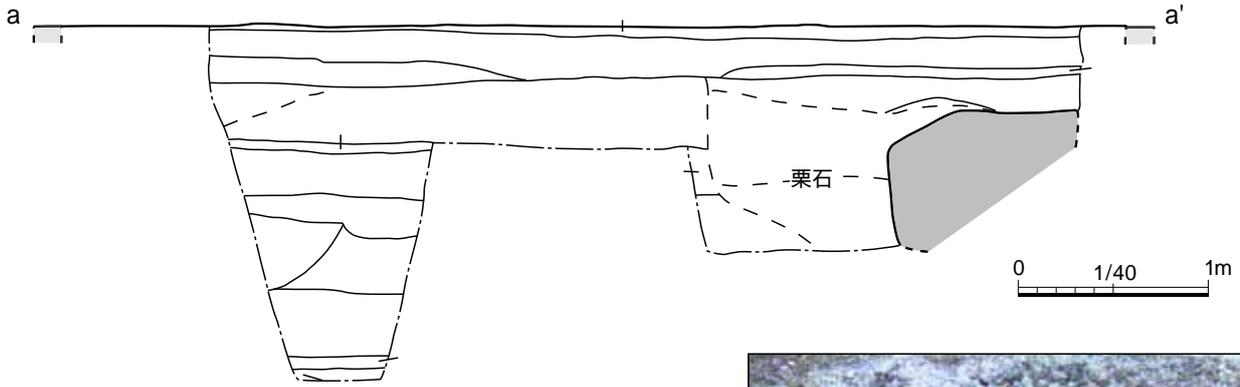
明治以降改修されたと  
思われる追手門の石垣



追手門跡の変遷



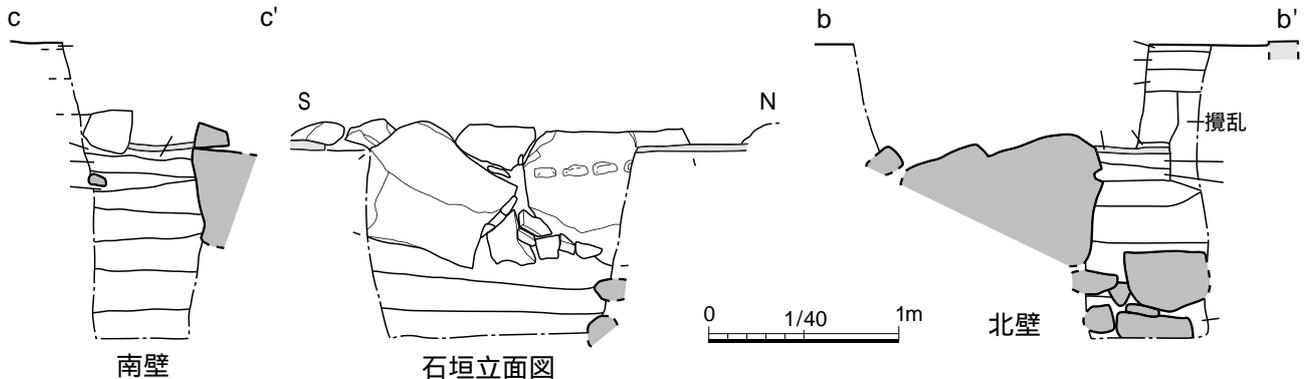
調査平面図



- 層 クラッシャーラン。
- 層 黒褐色砂礫土。現代の造成土。
- 層 暗褐色細砂。粘性・しまりあり。
- 層 円礫を含んだコンクリート。
- 層 にぶい黄褐色細砂。礫が混じり、しまりが強い。
- 層 黒褐色シルト。栗石の隙間に堆積した土。
- 層 褐色シルト。粘性が強く、小礫を含まない。  
石の隙間に堆積した土。
- 層 灰黄褐色シルト。礫を大量に含み、しまり・粘性が強い。
- 層 層と同質。
- 層 層と同質。
- 層 黄褐色細砂。しまり・粘性あり。礫が混じる。
- 層 褐色細砂。しまり・粘性が強い。礫混じり。
- 層 褐色細砂。しまり・粘性あり。 層よりやや礫が少ない。
- 層 灰褐色シルト。礫が混じる。
- 層 円礫層



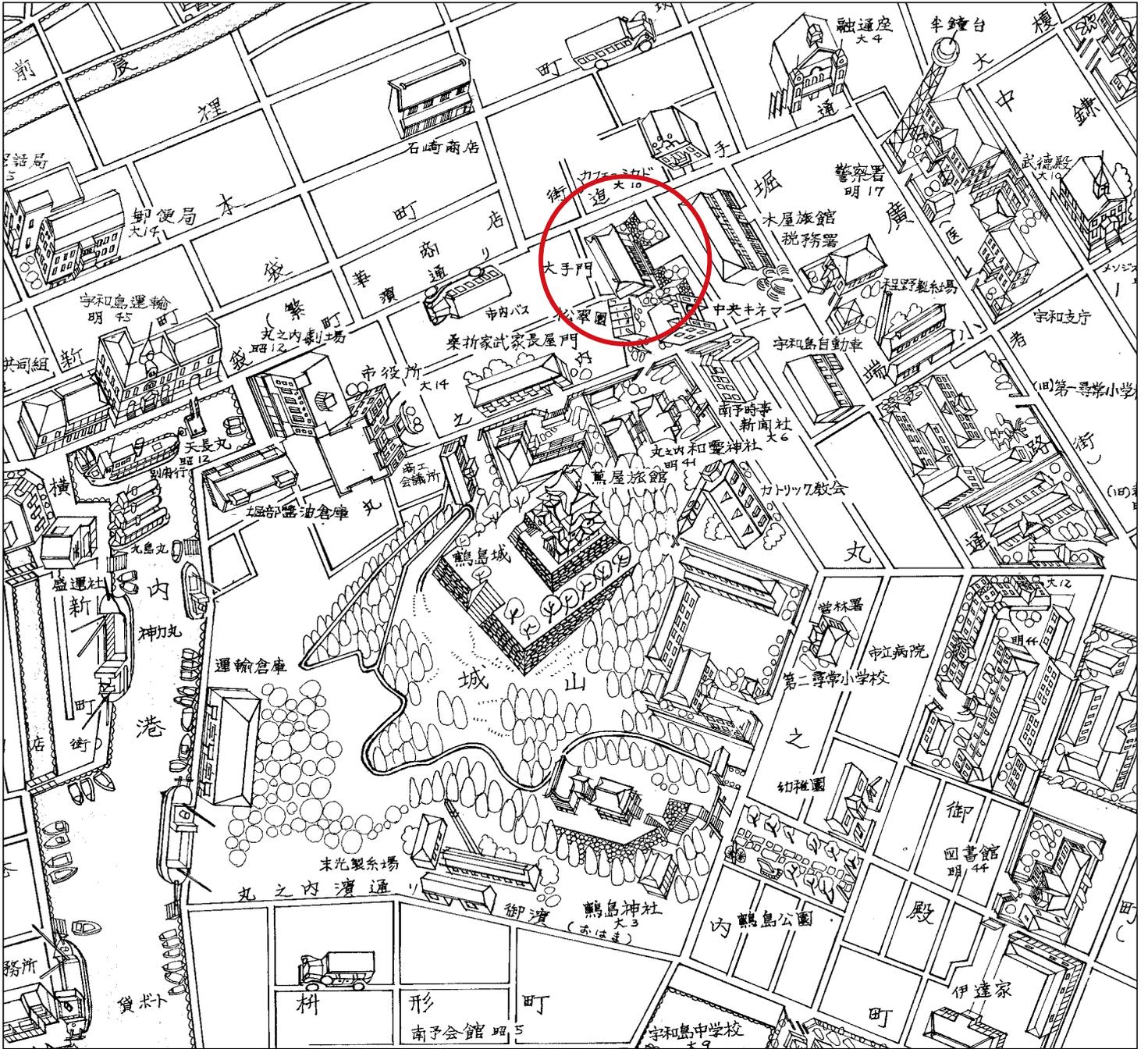
北壁土層断面図 (S=1/40)



- 層 クラッシャーラン。
- 層 灰黄褐色砂礫土。
- 層 黄褐色細砂。
- 層 にぶい黄褐色細砂。しまりは弱く粘性がややある。
- 層 黒褐色細砂。しまり、粘性なし。戦災に係わる堆積。
- 層 コンクリート。
- 層 暗褐色細砂。しまりなし、円礫含む。
- 層 灰褐色シルト。礫等は含まない。よくしまる。
- 層 黄褐色シルト。粘性が強い。
- 層 にぶい黄褐色細砂。しまりが強く、炭化物・瓦片を含む。
- 層 黄褐色シルト。粘性、しまりが強い。 層よりやや暗い。
- 層 にぶい黄褐色シルト。非常に粘性が強く、礫(割石)を含む。
- 層 にぶい黄褐色細砂。しまり、粘性あり。円礫を多量に含む。
- 層 明褐色細砂。粘性が強く、円礫を多量に含む。
- 層 褐色粗砂。しまりがややあり、粘性もある。円礫、炭化物片を含む。



石垣確認トレンチ土層断面図・石垣立面図 (S=1/40)



昭和初期の街のたたずまい 兵頭喜明作 部分